

尾張藩士・朝日文左衛門の生活行動空間

—GIS を用いた『鵜飼籠中記』の分析—

Life action space of ASAHI Bunzaemon, the samurai of OWARI

—Analysis of the 『OMUROTYUKI』 using GIS—

村田 祐介

MURATA Yusuke

名古屋大学大学院環境学研究科地理学講座

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

Geography, Graduate school of environmental studies, Nagoya University,

Furo-cho, Chikusa-ku, Nagoya-shi, 464-8601, Japan

あらまし：

本研究では、元禄～享保頃の日記・『鵜飼籠中記（おうむろうちゅうき）』を対象とし、主人公・朝日文左衛門の長期間にわたる生活行動を、GIS を用いた分析により解明する。また、地点が確認できない歴史史料を空間的に示すために、絵図史料、家系図等を併用していくことによって、解決していく方法をも合わせて提示する。まず、『鵜飼籠中記』全文をデータベース化する。次に、同時代の絵図史料であり、当時の屋敷割り図でもある『尾府名古屋図』に描かれる藩士名をデータベース化する。そして、近世前期における尾張藩士系譜集『士林浜潤（しりんそかい）』ならびに、『鵜飼籠中記』内で記される「屋敷替え」の記載を援用する。これによって、一時期の情報しか持たない絵図に対し、長い時間の幅を持たせることが可能になり、実際に朝日文左衛門が行動した場所を特定することが可能になる。その後、行動を地図にプロットすることによって、経年的に元禄～享保期の一武士の生活行動を把握する。以上のような分析手順により、『鵜飼籠中記』27 年分を対象とした結果、彼の行動は職務関係と親戚関係に縛られ、繁華街に頻繁に繰り出すわけではないことが理解できると共に、距離を持つ行動に関しては、同心円状に広がり、特に街道筋に影響を受けていたことが示された。

Summary：

In this research, the life action over the long period of time of ASAHI Bunzaemon, a hero, is solved by analysis using GIS for the diary 『OMUROCHUKI』 at the Genroku - Kyoho era time. Moreover, in order to show spatially the history historical records that cannot check a point, the method of solving is also united and shown by using together pictorial map historical records, genealogy, etc. First, a diary whole sentence is used as a database. Next, it is the pictorial map historical records of simultaneous cost, and the samurai name drawn on the pictorial map is used as a database. And the Owari samurai's collection of genealogies in the first half of modern times and the publication of the mansion substitute described within a diary is used for to the pictorial map that is a section at the time. It becomes possible to give the width of long time to a pictorial map only with the information on temporary by this, and it becomes possible to pinpoint the place where Bunzaemon actually acted. Then, one samurai's of the Genroku - Kyoho era term life action is grasped in many years past by plotting action on a map. His action having been bound by the job relation and the relative relation as a result of carrying out for diary 27 years, and having spread in the shape of a concentric circle about the action which has distance while being able to understand necessarily not letting out to shopping quarter frequently, and having received influence especially in the highway with the above analysis procedures, was shown.

キーワード：『鵜飼籠中記』, 日記, 『尾府名古屋図』, 絵図, 朝日文左衛門, 生活行動, GIS

Keywords：『OMUROCHUKI』, diary, 『BIFUNAGOYAZU』, pictorial map, ASAHI Bunzaemon, life action, GIS

I. はじめに

近世期における生活行動については人口移動に着目した研究の蓄積が数多く挙げられる⁽¹⁾。しかしながら、人口移動研究は奉公や結婚といった大きなライフイベントによる村内・村間移動は詳しく分析しているものの、個々の具体的な生活行動に関しては論及されることは少なく、経年的に人々の行動がどのように展開していたのかという点を論議するには至っていない。本研究はこうした一連の研究に位置するものであるが、特に日記史料を用いて近世都市における生活行動を経年的に解明する点に特色があると言える。

本研究では、『鸚鵡籠中記（おうむろうちゅうき）』を用いる。特に、文左衛門自身が執筆されたとされる元禄4年6月13日以降のものを対象とした。全ての記載内容を扱うわけではなく、始めに執筆者・文左衛門の行動および、彼に関連する事象・人物を全て抽出した。そして、文左衛門の交友関係を把握した上で、実際の行動を図示し、当時の武士の行動を理解する。なお、分析を進めるにあたっては、GISソフト・MANDARA（谷謙二氏・埼玉大学）を利用した。

文左衛門の生活行動の目的地確定に際して、地名表記がない場合、次の方法により確定させた。

目的地として人名が判明した場合、『尾府名古屋図』を用い、本絵図に描かれる藩士名を読み取ることで確定した。『尾府名古屋図』は、『籠中記』と同時代に描かれた絵図であり、「屋敷割り」図の1つである⁽²⁾。すなわち、名古屋城下の絵図であり、1区画ごとにそこに位置する藩士名、寺社名等が描写されている。ただ、時代的に1断面を示した絵図であり、人名が一致しない場合もある。そこで、目的地として人名が判明しない場合は、『士林泝洄（しりんそかい）』という近世前半部の尾張藩士系譜集を用いると共に、『籠中記』本文記載にしばしば書かれる「屋敷替え」の記載を入念に読み取り、それを先の『尾府名古屋図』に適合させていくことで、同定を行った。これらの資料を援用させていくことにより、訪問先の武士の職歴を追うことが可能になると共に、

変容する武士の屋敷配置を可能な限り明らかにした。これらの分析を踏まえた上で描かれた地図を中心に据え、文左衛門の置かれる社会的状況に照合させて検討した。

II. 地図データの作成（図1参照）

MANDARA を使用するにあたってまず、文左衛門が生きた当時の地理情報を示す『尾府名古屋図』の道路ネットワークをトレースし、縮小をかけ原図を作成した。武士の屋敷配置は道路を門戸としているため、道路形状を把握することが、屋敷位置を比定するのに好都合である。こうして作製した名古屋城下図をイメージスキャナで読み込み、画像ファイルで保存した。

次に、MANDARA の「白地図処理」を実行し、先ほどの画像ファイルに対してベクトル化した上で、「マップエディタ」を用い、名古屋城下図のライン編集を行う。ここでは、先の「白地図処理」でうまくベクトル化されなかったラインを修正すると共に、スケール・方位を設定する。そして、I章で書いた研究方法で同定した武士の屋敷や寺社等を、名古屋城下図上に点オブジェクトとして認識させるためプロットしていくと共に、属性データ（後述）と合わせるため、それぞれのオブジェクトに対して名称を付けていった。また、同時に道路ネットワークを、属性表示を持たないダミーの線オブジェクトとして表示させた。

III. 属性データの作成（図1、表1,2参照）

MANDARA では地図データに照合させる属性データが必要となる。属性データは表計算ソフトを用いる、あるいはMANDARA に付随する属性データ編集機能によって作成できるが、本研究では表計算ソフトを用いる。

まず、文左衛門の生活行動の目的地となる場所の地理行列を作る。上下方向に、目的地の武家名、地名を並べ、横方向に行動した回数、行動内容の回数等をセルに入力する。ここで、目的地の武家名、地名には地図データと同じ名称をつける必要がある。

これは、地図データで作成した点オブジェクトと重ね合わせるためである。次に、MANDARA タグを付けた上で、クリップボードにコピーし、MANDARA 上で、属性データを読み込んでいくことで図化される。

IV. 文左衛門の生活行動空間

1) 文左衛門の交友関係 (表 1 参照)

文左衛門の行動空間を考える前に、その行動を形作る大きな要因となる交友関係を、はじめに明らかにする必要がある⁹⁾。文左衛門は 27 年間にわたって、同一の友人群との関係があったわけではなく、時代に応じて交友関係は変化していた。何よりも『籠中記』内に記され、彼の行動と少なからず関係する人物が 1400 人ちかく存在した。特に、武士だけでなく、多数の商人、町人、農民とも交友を持っており、文左衛門の交友範囲の広さを如実に物語っていた。ただし、それらの人物と全て懇意にしていたわけではなく、1 回限りの出会いとなった人物も多数いた。表 1 は『籠中記』全 27 年分に登場した中で、文左衛門宅が起終点となる、あるいは他家にて文左衛門が顔を合わせた回数を示したものを例示している。表 1 からは、文左衛門と友人との親密具合を量ることが可能である。つまり、時期に応じて交友関係が変化していることが理解でき、それに応じて文左衛門の行動も変化していたと思われ、数年間のみ突出して現れる人物や、交友が長期間継続している人物がいたことも理解できる。

2) 文左衛門の生活行動空間 (表 2、表 3 参照)

まず、文左衛門の行動空間を探るにあたり時期を 3 分割し、それぞれ第 1 期 (元禄 4～12 年)、第 2 期 (元禄 13～宝永 5 年)、第 3 期 (宝永 6～享保 2 年) とした。

①第 1 期 (元禄 4～12 年) (図 2～8 参照)

第 1 期は、文左衛門宅周辺への行動と広井方面、そして富永彦兵衛宅への行動が目立っている。また、若宮、真福寺に出歩く姿がしばしば見受けられた時期であった。書き出しの数期間は、『籠中記』を書くスタイルが統一されてなく、全ての把握はできない

が、それでも禄を食む前の一武士の行動を示してくれる。

まず、元禄 6 年ごろまでは、若宮、真福寺、セツ寺に頻繁に出掛けている姿を見て取れた。例えば、元禄 5 年 9 月半ばにおける若宮への行動は著しく、15、16、18 日と連続して「操り」を見に出掛けている。また、元禄 5 年 5 月 13、14 日の記載「十三日晴、戌の尅迄町を廻る」「十四日晴、子之尅迄遊回す」などを含めて考えるならば、結婚、出仕前の武士は相当程度時間の余裕があったことが理解できる。時間の余裕は同時に好奇心旺盛な文左衛門の行動空間を拡大させた。

広井方面への行動は、元禄 6 年における朝倉忠兵衛の娘・けいと結婚以降に急増した。結果、朝倉忠兵衛宅への文左衛門の行動は、第 1 期で 159 回、総計では 206 回を数え、全目的地の 4 番目に相当するまでになった。当初は弓術を習得するための行動だったが、結婚後は親戚付き合いが主となった。町を徘徊したり稀に遠出したり近隣の友人宅に限定されていた文左衛門の行動は、結婚を契機として新たな展開を見せた。また、結婚当事者の朝倉家だけでなく朝倉家親戚筋にあたる松井十兵衛宅、朝岡甚五右衛門宅へも行動空間は広がった。

一方、城下外への行動は、熱田 (24 回) を筆頭に以下、矢田 (11 回)、神宮寺 (10 回) と続いた。熱田は参詣目的が主体であり、矢田は砲術で水野作兵衛に弟子入りしていたことから鉄砲打ちに赴いていたものである。個々の回数は少ないが、その中で現在の庄内川沿いの味鏡、山田、志賀への行動や、山崎川沿いの山崎、川名などへの釣り目的の行動を把握できる。ほかに、熱田同様参詣目的で、遠方の津島や伊勢に赴く姿が数度確認できると共に、領地であった野崎村に検見を兼ねた行動を確認できる。

②第 2 期 (元禄 13～宝永 5 年) (図 2～8 参照)

第 2 期における文左衛門の行動は、若尾政右衛門宅への行動が顕著になる (59 回) と共に、佐分源太左衛門宅へも増加を見せ (49 回)、文左衛門近隣の石川瀬左衛門宅への訪問は急増している (132 回) ことが示されている。若尾政右衛門は、文左衛門と同じ

御畳奉行の役職を持つ。しかし、2人の関係は公用だけに止まらず私的な面でも密接な関係にあった。というのは、文左衛門の政右衛門宅への全行動131回のうち、公的な内容が書かれるものが13回であるのに対し、酒食内容が記載されるものは実に72回にも及び、行楽行動だったとされるのも10数回ある。確かに、2人は同じ職場の同僚だが、三味線引きを呼んだり、浄瑠璃に興じたりする行楽行動の頻度が他の人物と比べて多いことから、人間関係を密着化させ、行動を増加していったと理解できる。さて、佐分源太左衛門は元来文左衛門の鑓術師範だった。実際、文左衛門は鑓術以外にも、手当たり次第に武門に入門しているのだが、どれも長続きしなく、それらに通うための行動も継続しない。ところが唯一、源太左衛門だけが、第1期からの行動が継続し第2期に急増する。これは、源太左衛門が文左衛門と共に、頼母子講グループの一構成員だったところが大きい。実際この時期での佐分宅への文左衛門の行動は計46回見られるのだが、うち頼母子が含まれるものは15回なのに対し、鑓稽古が含まれるものはわずか5回に過ぎない（なお酒食が記載されているものは36回に及ぶ）。本来、鑓を習得する目的での源太左衛門への行動が、時間の経過につれ、頼母子や酒食が第1目的になったと考えられる。

さて、第2期における行動の変容で最大のものは2つあり、1つは石川瀬左衛門宅、1つは朝倉忠兵衛宅への行動である。まず、瀬左衛門宅は文左衛門のほぼ斜め向かいに位置していた。当然、極めて近距離に位置するため回数が多いことは推測できるが、第2期後半における瀬左衛門宅への行動の増加は、それを省みてもかなり著しい。それまでも瀬左衛門宅への訪問は確認できるが、年間10回を越えることは無かった。ところが、元禄17年から宝永3年までの行動は総計で100回以上におよび、通常とは言えない頻度になっていた。一方の忠兵衛は、宝永2年1月に文左衛門が先妻・けいと離縁したため、以後の文左衛門の朝倉家への行動は一切見られないことはおろか、その後一切会ったという記載が無い。それ故、第1期に旺盛を極めた文左衛門の堀川端方

面への行動は離婚を契機に激減したことが示される。

最後に、城下外への生活行動空間は、第1期と比較して東に偏向していることが分かった。これは、竜泉寺(吉根村)、大森寺(大森村)、木ヶ崎(守山村)や、伊勝、丸山、末森等への行動である。行動の内容自体も第1期ではあまりなかった酒食目的が主体となって記載され始め、第1期の武士のたしなみに則するような目的から、純粋な遊興目的に基づいた城下外への行動が目立ち始めた。一方で、第1期に多く見られた庄内川沿いへの釣りは継続され、むしろ味鏡(15回)はこの時期が最大だし、志水、山田、矢田等への同様の目的での行動も継続されており、さらに地蔵池(北井戸田村)、まむし池(古井村)といった新たな場所もまた開拓された。だが、第1期に頻出した城下外への芝居・操り目的での行動は、激減した。

③第3期(宝永6～享保2年)(図2～8参照)

第3期の文左衛門の行動は、渡辺源右衛門(渡辺権内)に代表される渡辺家、水野文四郎に代表される水野家、古田勝蔵、垣沼甚左衛門、そして成瀬修理や南寺町・橘町一帯に比重を移していた。一方で第1期に目立った広井周辺への行動は甚だしく減り、富永彦兵衛宅への来訪も少なくなった。水野家は、先妻・けいと娘・あぐりの嫁ぎ先である。婿の久治郎は水野村在住のため、『籠中記』で多く顔を見せないが、久治郎父・権平と久治郎伯父・文四郎は城下に居住した。水野権平(49回)、水野文四郎(148回)に代表される水野家への行動の急激な台頭は、結婚当事者同士だけでなく、嫁の父・文左衛門の行動を増加させ新たな行動空間の拡大をもたらした。一方、古田勝蔵宅への行動が飛躍的に増大し(154回)、勝蔵の隣人・垣沼甚左衛門宅への行動も同時に増加した(74回)。文左衛門が後妻・すめと結婚したのは宝永3年だから第2期に大きな傾向を見せてもおかしくないが、顕著に表れたのは少し期間をおいた第3期だった。これは正徳元年に文左衛門とすめの間に、娘・あぐりが誕生したことが大きな要因だと考えられる。他、勝蔵宅を中心に甚左衛門宅とは反対側の1軒先に高田新蔵宅があり、新蔵に対する行動も甚左衛門同様に突然増加した(35回)事が注目される。

親戚以外に目を向けると、第1期(218回)、第2期(92回)と比較して富永彦兵衛宅への行動がほとんど見られない(1回)ことに気付く。これは宝永6年3月22日に成瀬修理が富永彦兵衛に替わり御城代に就任した事が大きいと考えられる。つまり、御城代組同心番としての出仕前、出仕後に彦兵衛宅に「対面」することが多くあった文左衛門だが、あくまで職務上の関係でプライベートでは密接な関係とはいいがたかったと思われる。さて、第3期に入り寺社への行動が増加していることは特筆すべきだろう。第3期には、文左衛門の父母が相次いで死亡するとともに、正徳5年8月晦日には伯父・渡辺源右衛門も74歳で死亡し世を去る者が多かった。この時期の文左衛門は、血筋の近い者たちの菩提寺に葬儀、法事等で数多く赴いており、例えば朝日家の菩提寺・善篤寺(44回)への行動頻度の増加で、理解できる。ところで、第3期以前までに葬儀、法事等で赴いた寺社への行動が持続する場合もあり、明らかに寺社が持つ性格が異なっていることが分かる。

第3期における城下外への生活行動空間は、大森寺(18回)を筆頭として第2期より一層東よりになった。他に木ヶ崎、宝勝寺(守山村)でも顕著に示される。これは水野久治郎と、おこんとの婚姻によると考えられる。それは文左衛門が、水野家在所の水野村に行く際に通過地である大森寺、木ヶ崎等ではし休憩を入れてから水野に赴く記載がしばしばあることから理解できる。つまり、水野家との婚姻は城下内だけの行動空間の拡大に止まらず城下外における拡大にも一役買った。また、これまで釣り目的が主であった庄内川沿いへの行動もその内実を変化させ、主に酒食を中心とした行動になった。この時期は文左衛門も30代後半から40代に入る時期であり、城下外への行動のあり方自体が変化していったものと考えられる。この傾向は、沢の観音(熱田)への行動でも裏付けられ、文左衛門の沢の観音への行動8回中7回酒を嗜んでいる。沢の観音は単独の目的地ともなったが熱田神宮への参詣と共に扱われる場所でもあった。

V. おわりに

本研究によって明らかになったことは次のようにまとめられる。

- ①酒食関連の行動は、基本的に親戚宅、友人宅そして自宅にて行われるものであり、時代劇等で言われるように、武士が飲み屋で杯を傾ける姿は非常に少ない。
- ②文左衛門の生活行動空間は、親戚筋と職務関連に集約される。また、親戚筋の居宅を起点として、再び近隣に拡大傾向を示す。
- ③また、城下を中心として同心円状に広がり、街道が存在する場合はそれに沿うように拡大する傾向を示した⁽⁴⁾。

本研究にて、日記資料という長い時間軸の歴史史料を時の断面の絵図上で表現するために、系譜集という短い時間軸を持った史料で整合させて空間的に示すといった新たな試みが適応可能であったことは大きな収穫だった。同時に、日記資料は研究の主目的だけでなく、データとして長短の時間スケールを合わせる際にも有効活用できることを示せた。

【利用 GIS ソフト】

谷謙二作成『地理情報分析支援システム MANDARA』(2002/11/29 現在)

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~mandara/>

【参考文献】

- (1)例えば①速水融『近世濃尾地方の人口・経済・社会』創文社,1992.
- ②木下太志「江戸期農民の人口移動パターン—東北農村の宗門改帳の分析から—」社会経済史学 66・4,2000,3-22 頁.など数多い。
- (2)矢守一彦「城下絵図の類別—とくに藩用図について」(藤岡謙二郎編『城下町とその変貌』柳原書店,1983) 29-40 頁.
- (3)例えば①水本邦彦「近世の農民生活—庄屋の交遊関係から」(日本村落史講座編集委員会編『日本村落史講座7 生活Ⅱ近世』雄山閣)1990,3-26 頁.②塩川隆文『『応響雑記』の性格—田中屋権右衛門の交遊と思想を中心に—』富山史壇 135・136,2001,24-45 頁.など。
- (4)山間部における生活行動と同様の結果となった。村田祐介「近世末期奥三河・山崎家『日知録』にみる行動領域」歴史地理学 43・3,2001,36-52 頁.

表1.『鸚鵡籠中記』データベース見本

名前	総計	元4	元5	元6	元7	元8	元9	元10	元11	元12	元13	元14	…	享2
相原政右衛門	11	0	1	3	5	1	0	0	0	1	0	0	…	0
相原久兵衛	60	0	0	8	5	16	15	12	1	1	0	1	…	0
相原小左衛門	17	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	…	0
相原政之右衛門	142	0	0	11	5	3	11	12	17	5	2	1	…	1
相原藤蔵	15	0	2	5	0	0	8	0	0	0	0	0	…	0
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
渡辺八郎右衛門	301	0	1	1	1	0	0	0	1	1	3	1	…	14
渡辺平兵衛	98	0	6	10	5	9	9	6	8	12	4	22	…	0

注1:『鸚鵡籠中記』(元禄4年6月13日～享保2年12月29日分)より、筆者作成

注2:表中の元は元禄、享は享保のそれぞれ略を示す

注3:ここでの総計は行動回数ではなく、出会った総計を指している

表2.『尾府名古屋図』・『士林浜廻』データベース見本

人名	士林	士林頁	絵図	絵図名	絵図区画
相原久兵衛・空成	○	1-268	△	政之右衛門	10-6
相原源蔵	○	1-397	△	七兵衛	7-39
相原政之右衛門・小左衛門	○		○	政之右衛門	10-6
相原藤蔵	○		○	藤蔵	65-10
青木小左衛門	×		×		
朝岡基五右衛門・弥五右衛門	○	2-308	○	弥五右衛門	49-24
朝倉才兵衛	○	4-138	×		
朝倉忠兵衛	○	4-138	○	忠兵衛	21-11
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
渡辺弾七・久太夫	○	1-298	×		
渡辺八郎右衛門	○		○	八郎右衛門	10-8
渡辺飛騨守	○		○	飛騨	18-9
渡辺平兵衛	○	1-297	×		

注1:士林は『士林浜廻』、士林頁は『士林浜廻』の冊数と頁数を指し、絵図は『尾府名古屋図』を、絵図名は絵図の中における記載名を、絵図区画は、筆者が任意に整理した区画番号をふってある

注2:表中の○は記載があるもの、△は記載がないが場所把握が周辺資料によって可能なもの、×は記載がなく、場所を同定できないものを指す

表3. 本発表中における登場人物略歴

氏名	別名	役職	石高	備考
朝岡基五右衛門	弥五右衛門	御馬廻、御城下道奉行、御目付	150石	肝煎・彦坂平太夫の娘婿
朝倉忠兵衛		御弓役、御弓矢奉行	300石	正2.6.14死去。先妻けいの父
井野口六郎左衛門	井口六郎左衛門	大寄合、御城代	2500石	宝5.4.4死去。正2.2.5死去
天野源蔵	治部右衛門	御鉄砲頭、平御寄合	400石	「文会」構成員
石川瀬左衛門	(石)瀬左	御城代同心(成瀬隼人正組)	200石	文左衛門宅斜め向かいに居住
垣沼甚左衛門	柿沼甚左衛門	(不明)	(不明)	古田勝蔵の隣人(東側)
佐分源太左衛門	(佐)源太左	御馬廻、御書院番、御普請寄合	200石	鑓術の師
高田新蔵		(不明)	(不明)	古田勝蔵宅の西側近隣に居住
富永彦兵衛	兵右衛門	大番頭並、御城代	1500石	宝6.1.6隠居。正4.1.15死去75歳
成瀬修理		御側同心頭、御城代	3000石	宝6.3.21富永彦兵衛に代わり城代
古田勝蔵	弥四郎	(不明)	(不明)	後妻・りよの義兄
松井十兵衛	重兵衛	御馬廻	(不明)	元15.11.28死去67歳。娘は朝倉忠兵衛妻
水野権平	勘太夫	水野御案内	40石	正6.3.7死去65歳。久次郎父
水野久治郎	久治郎	水野御林奉行	(不明)	宝6.11.26被召出。おこん夫
水野作兵衛		長岡炉裏御番	(不明)	正3.1.10死去。鉄砲術の師
水野文四郎	分四郎	山方御代官、尾州郡奉行、三村御代官	18石	水野権平従兄弟
若尾政右衛門	弥次右衛門	御城代組同心、御量奉行	100石	御量奉行は元7.6.26に任命
渡辺覚右衛門	角右衛門	五十人組小頭、御納戸、奥御番	(不明)	元11.3.1死去76歳。源右衛門伯父
渡辺源右衛門	全香	御城代組同心小頭(富永彦兵衛組)	150石	正2隠居。正5.8.晦日死去74歳。文左衛門伯父
渡辺権内	源之助、源右衛門	御城代組同心、御天守鑓奉行	(不明)	正2.1.25家督相続。源右衛門子
渡辺七内		五十人組、新御番	35石	享2.6.9死去72歳。源右衛門従兄弟
渡辺弾七	久太夫、久右	御歩行、御下屋敷奉行	(不明)	宝1.7.24死去58歳。源右衛門弟
渡辺武兵衛		(不明)	(不明)	元17.3.10死去50歳。源右衛門弟
渡辺平兵衛		御書院番、奥御番、御弓頭	(不明)	元15.3.6死去64歳。源右衛門伯父

注1:『鸚鵡籠中記』、『士林浜廻』、『正徳年中分限帳』、『元禄八亥頃分限帳』、『金鱗九十九之塵』および名古屋博物館資料より筆者作成

注2:人名は『籠中記』にての通称を用いており、石高は年代によって異なることもある。

注3:例えば渡辺弾七の死亡日時(『籠中記』は宝永元年7月24日、『士林浜廻』は正徳5年7月23日)のように、史料によって記載が異なる時は、『籠中記』を優先した。

地図データベース

属性データベース

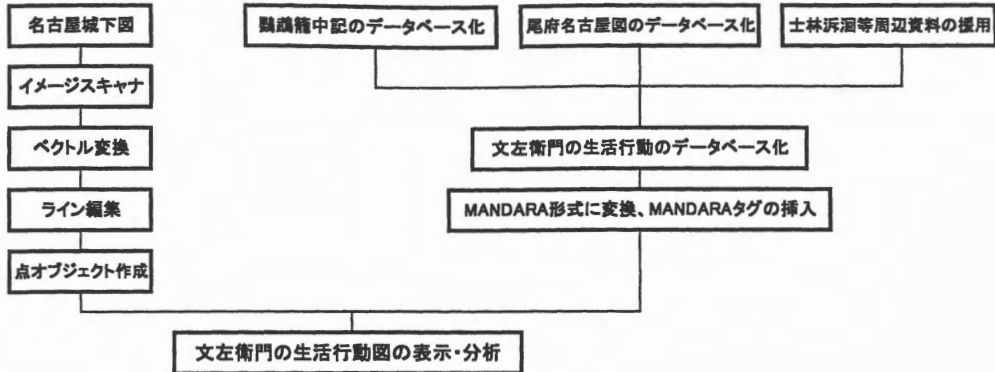


図1. 本研究上での分析の流れ

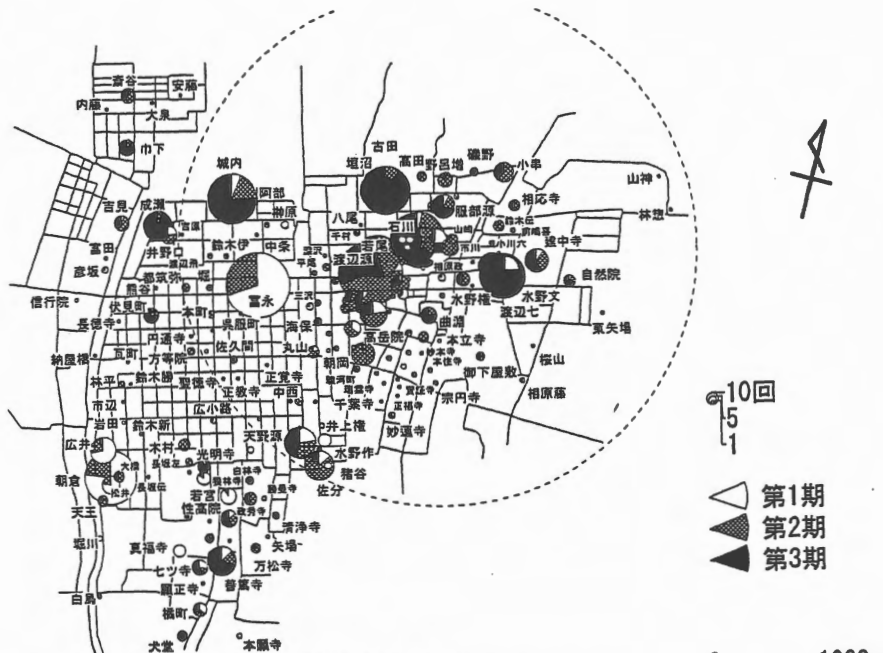


図2. 名古屋城下の生活行動図
(破線は文左衛門宅を中心とした半径2kmの範囲)

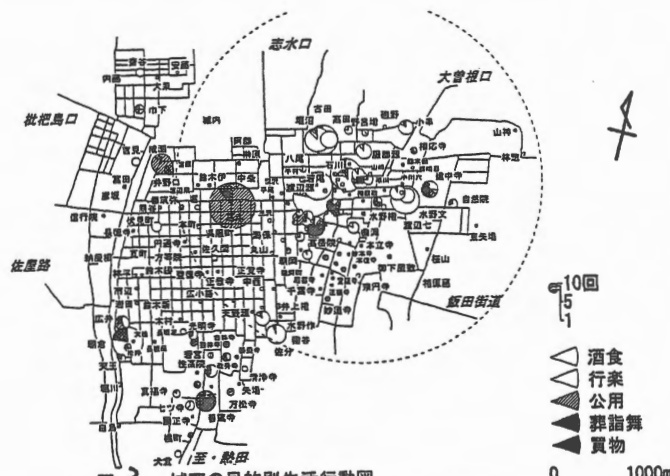


図3. 城下の目的別生活行動図
(破線は文左衛門宅を中心とした半径2kmの範囲)

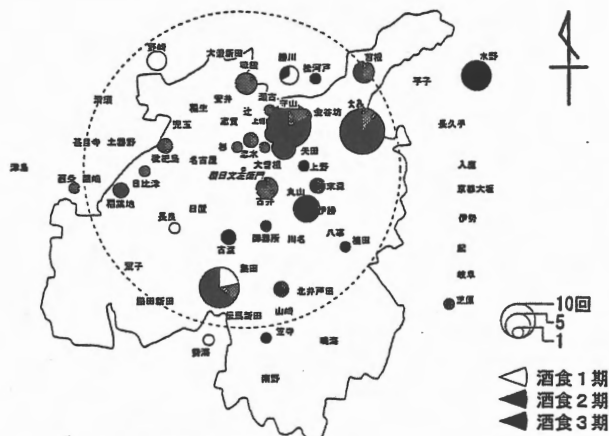


図4. 酒食を伴った行動(城下外)
(破線は文左衛門宅を中心とした半径10kmの範囲)



図5. 行楽を伴った行動(城下外)
(破線は文左衛門宅を中心とした半径10kmの範囲)

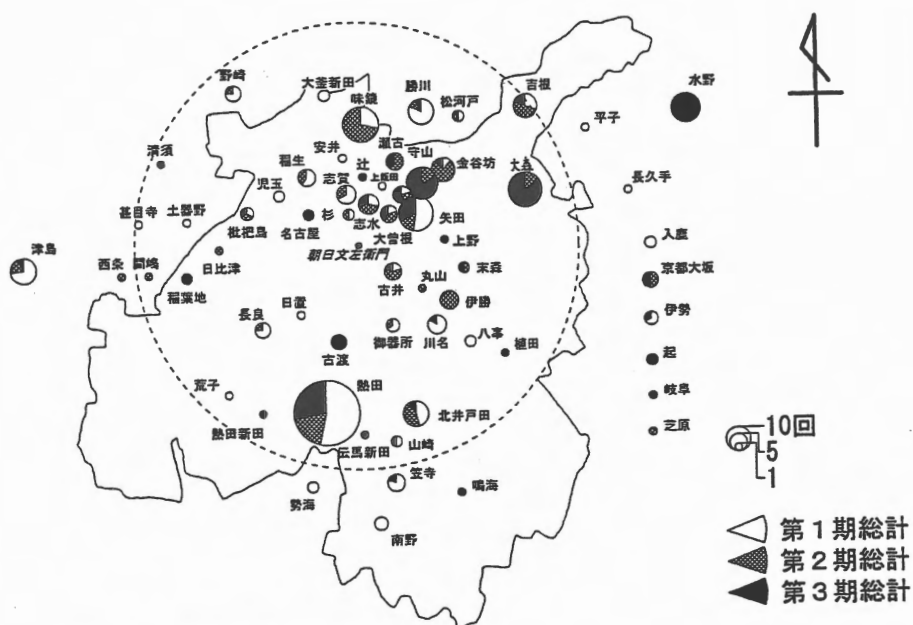


図6. 名古屋城下外的生活行動図
(破線は文左衛門宅を中心とした半径10kmの範囲)

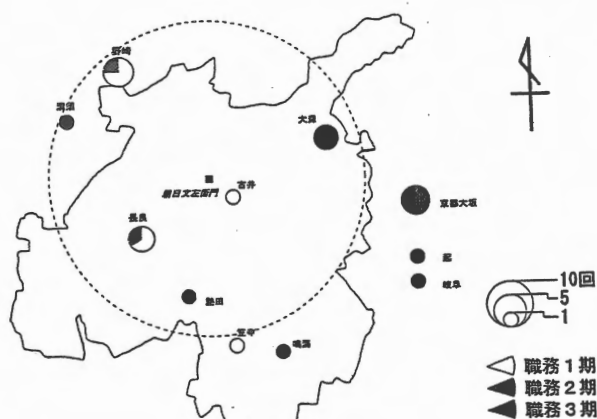


図7. 職務を伴った行動(城下外)
(破線は文左衛門宅を中心とした半径10kmの範囲)

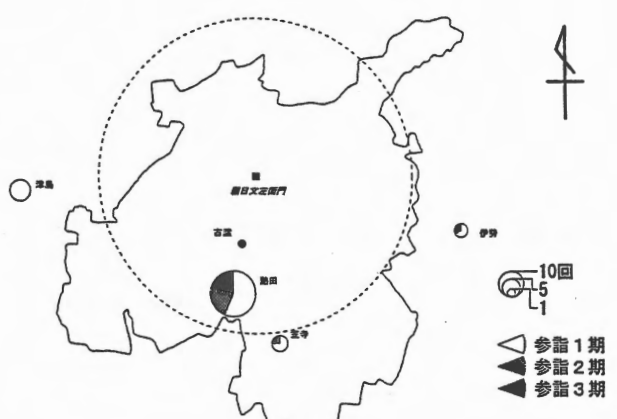


図8. 参詣を伴った行動(城下外)
(破線は文左衛門宅を中心とした半径10kmの範囲)